

大阪市立大学工学部 学生員 ○北瀬 弘康
 大阪市立大学工学部 フェロー 西村 昂

1. はじめに

近年の公園に対するニーズは、子供の遊び場、住民の憩いの場としてだけでなく、都市の美観・快適性、都市防災、環境保全、身近さ等、広範囲かつ、高レベルなものへと変化しつつある。このような社会的要求の中で、阪神・淡路大震災は、避難路や延焼防止帯としての効果をもたらした帯状緑地の必要性に対する認識を高めることとなった。帯状緑地は、縁辺部が大きいことで、近年の公園に対するニーズに応える長所をもっているため、今後、より一層の整備が、進められると考えられる。

そこで、本研究ではすでに帯状緑地として整備されている夙川公園において、近隣住民に対して「景観形成」・「環境保全」・「防災」・「レクリエーション」の相対的重要度に関する意識調査をおこない、今後の帯状緑地の整備のあり方を検討した。

2. 既往の研究

帯状緑地に関する研究は多くないが、平井ら¹⁾の研究がある。この研究において夙川公園は生活・地域に対してともに約8割の人が「役立っている」と感じられていることが調査によって把握されている。そこで、本研究では、帯状緑地の効果を「景観形成（景観）」・「環境保全（環境）」・「防災」・「レクリエーション（利用）」の4つの主要側面より、その実態及び、これらの相対的重要度によって評価をおこなった。○内は短縮表現である。

3. 意識指標の数量化方法

それぞれの効果は、全効果を1としたときの百分率で表すこととした。本研究においては、以下の3つの方法によって数量化を試みた。

①「単一」・・・4つの項目それぞれに対し、図-1のような質問により、相対的重要度を決める。

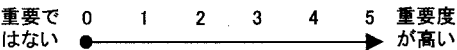


図-1 単一による質問例

②「AHP」・・・図-2 に示すような質問をおこない 4

項目を一对比較していくことで、AHP（階層化意思決定法）を用い、相対的重要度を求める。



図-2 AHP 質問例

③「コンジョイント分析」・・・表-1 のようにパターンの比較による質問方法によって、8 パターンを順位付けすることでコンジョイント分析をおこなうことで相対的重要度を求める。

表-1 コンジョイント分析質問例				
パターン	景観	環境	防災	利用
1	○	×	○	×
2	○	○	×	×

注) ×はその効果がなくなるものと仮定し、○はその効果が、現状維持と仮定する

4. 調査概要

本研究では兵庫県西宮市夙川公園を調査対象とし、1999 年 12 月中旬から下旬において自治会長に調査表の配布・回収を依頼した。回収したサンプル数は 294 部であり、回収率は 7 割であった。アンケート項目を大別すると、「回答者の属性」・「公園効果の相対的重要度」・「数量化方法の評価」・「自由回答」の 4 つである。

5. 整備効果の数量化

夙川公園における調査から、3 つの方法すべてにおいて同様の傾向が見受けられたもののみに着目した。図-3 は「家から公園が見えるか」という可視性別に夙川公園の効果の相対的重要度を求めたものである。これより、見えることで「景観」・「環境」の重要度が高まっているのがわかる。これは、図-4 より見えることによって利用回数に差がないので、利用による傾向ではない。また、見えることで、公園に近くなるが、図-5 が示すように「環境」は、距離にも関係が薄い。つまり、家から公園が見えることで「景観」・「環境」、特に「環境」の重要性が高くなることがわかる。よって、公園の見える距離を大き

くすることで带状緑地の「環境」の重要度があがる
ことがわかる。

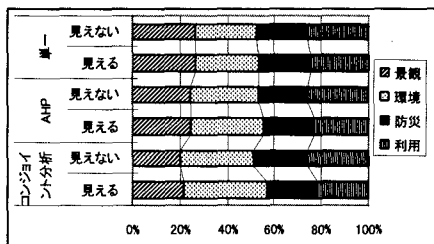


図-3 可視性の有無別相対的重要性

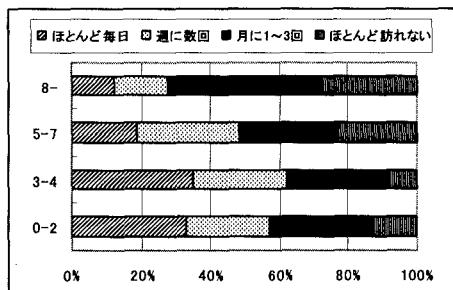


図-4 徒歩での所要時間別利用頻度の割合

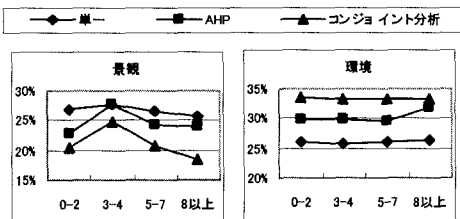


図-5 公園までの所要時間別景観・環境重要度

図-6は、居住地別に見た環境に対する意識である。上流と下流では、上流には公園と住宅との間に交通量のある道路が存在しているため上流の方が下流よりも「環境」が大きくなっている。つまり、汚染源のある場合は带状緑地の環境の効果がより感じられることとなる。

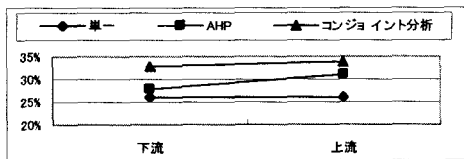


図-6 上・下流別環境重要度

また、利用の側面から見てみると、図-7が示すように「子供の遊び場を作る」・「休養・休息の場を作る」ことが「利用」の重要性を上昇させる。つまり、これらの利用によって、带状緑地の「利用」の評価が上昇する。また、図-8より、周囲の見ながら利用

することで「景観」の重要性を上昇させることがわかる。これより、周辺を見ながらの利用を促進させることで、带状緑地の「景観」の効果が評価される。

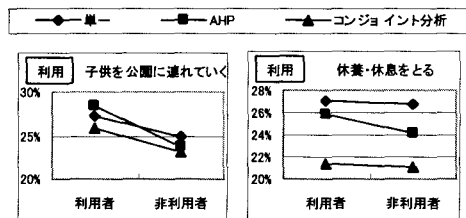


図-7 利用状況別重要度（利用）

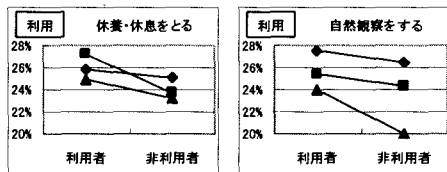


図-8 利用状況別重要度（景観）

6. まとめと今後の課題

本研究においては、带状緑地の効果の評価を上昇させる要因についての傾向がわかった。それらの整備項目は期待する効果別に表-3のようにまとめられる。

表-3 期待する効果別整備項目

期待する効果	整備項目
景観	・公園が見える範囲をより大きくとる ・花見、自然観察、休養、休息等の周辺の景観を見て回りをやすくする
環境	・環境汚染源の近くに配置する ・公園が見える範囲をより大きくとる
利用	・子供の遊び場を作る ・休養・休息の場を作る

今後の課題は、本研究においては4つの大分類で評価をおこなったが、より詳細な項目についての評価が必要である。

また、本研究では夙川公園のみを調査対象としたが、今後より多くの带状緑地を対象にして調査・分析をおこなっていく必要性もあると思われる。

なお、アンケート調査実施に際し、ご助力いただいた西宮市企画財政局都市計画部、および配布・回収のご協力をいただいた自治会長等の関係者各位に記して感謝の意を表します。

【参考文献・資料】

- 1) 平井住夫；河川・道路と一体となった带状緑地の評価に関する住民意識；土木計画学研究・概要集, No. 22 (2)；1999年10月